

看護にかかわる総合型・学校推薦型選抜を見据えた パフォーマンス評価

—パフォーマンス課題「2040 年の未来の看護」—

中切 正人, 四谷 淳子, 大久保 貢 (福井大学)

本研究は看護学士課程志願者対象のパフォーマンス課題と評価を開発し、看護学士課程志願者の汎用的な選抜・評価方法の確立を目指す実証的研究である。福井大学医学部看護学科の教員の指導と協力を得て、福井県内の高校生を対象とする高大連携探究プロジェクトを開発し実施した。受講者はパフォーマンス課題「2040 年の未来の看護」について作業課題とグループワークに取り組み、その活動は評価者により「思考力」「コミュニケーション力」(各 5 つの構成要素)としてルーブリックで評価された。3 月実施の第 1 回プロジェクトと、改良版の 7 月実施の第 2 回プロジェクトについて報告する。

キーワード：看護師志願者、パフォーマンス課題と評価、ルーブリック、高大接続、選抜試験

1 はじめに

本研究は、看護学士課程志願者対象のパフォーマンス課題とその評価を総合型選抜・学校推薦型選抜に活用して、汎用的な選抜・評価方法の確立を目指す実証的研究である。

これまで、文系分野のプロジェクトとしてパフォーマンス課題「2050 年の未来のカリキュラムの作成」を設定し、福井県内の高校生から受講者を募集して、事前・事後課題およびプロジェクト当日のグループワークとプレゼンテーションを分析対象とするパフォーマンス評価を行ってきた(中切ほか, 2019, 2020)。これまでの研究成果と反省を元に、今回は看護学士課程志願者に特化したプロジェクトを開発し、その 2 回の実施状況と今後の課題について報告する。

1.1 本研究の目的

本研究は、看護学士課程志願者の選抜試験への適用を目指すプロジェクトを立ち上げ、そこでのパフォーマンス課題と評価のあり方を検討・考察することを目的とする。

1.2 本研究の方法

本研究の目的を遂行するにあたり、以下の研究方法をとる。(1) 看護学士課程の卒業生に求められる看護実践能力を修得するのに必要な能力として「思考力とコミュニケーション力」を取り上げ、それらを育成・測定・評価するプロジェクトを企画し、そこで遂行されるパフォーマンス課題を開発する。(2) パフォーマンス課題を遂行するために受講者に課す事前課題を開発する。(3) プロジェクト当日の日程や提示資料、

グループワークの内容やプレゼンテーションの方法等について検討する。(4) パフォーマンス評価を思考力とコミュニケーション力として、その構造と構成要素および評価規準を明示し、その採点方法・採点基準を評価基準としてルーブリックに示す。(5) 思考力とコミュニケーション力を育成・測定・評価する場面をパフォーマンス課題の遂行場面に位置づけ、プロジェクト全体を概観する。(6) プロジェクト終了後、プロジェクト観察者とパフォーマンス評価担当者およびファシリテーター、そして受講者からの意見を収集し、パフォーマンス課題とパフォーマンス評価の構成を検討・考察して、課題を提示する。

2 「2040 年の未来の看護」プロジェクト

パフォーマンス課題の開発と提示資料の作成に当たり福井大学医学部看護学科のご指導とご協力を得た。

2.1 看護にかかわるパフォーマンス課題の開発

本研究は看護学士課程の卒業生に求められる看護実践能力を修得するのに必要な「思考力とコミュニケーション力」を測定・評価する選抜試験を想定したパフォーマンス課題「2040 年の未来の看護」を開発した。

2040 年は、現在高等学校在学中の受講者が 30 代後半となり、社会人として働き盛りの年齢となっている。一方、戦後増え続けてきたわが国の高齢者が全人口に占める比率は、今後も高まり続けることが予想され、「65 歳以上を支える現役世代は 1950 年には 12.1 人だったが、2040 年には 1.5 人になる」(成毛, 2021: 127)。これに呼応して、現役世代の医療費負担の点で現在の医療制度の維持が困難になることが予想され、その対策案も含めてこの問題に対する記述は政

府関係資料（経済産業省，2019）²⁾をはじめ，多くの医療関係者の論考等で確認することが出来る。

このように，これまで国民皆保険制度に守られて病院が身近な存在だった状態は，今後大きく変化せざるを得ないと考えられる。そこで，将来の看護師志望者が未来の医療環境の中で，「特に医療を希望する人の自宅でどのような看護を提供することが出来るか」というテーマをパフォーマンス課題として設定した。

こうした未来社会をテーマとするパフォーマンス課題の設定には，これまで報告者が福井大学で実践してきた近代大学の創設者フンボルトの理念「文系ゼミナール教育（理系は実験室教育）」（潮木，2004）に基づくプロジェクト「2050年の未来の中学校のカリキュラムの作成」を参照した。この課題は文系学部志願者を対象として，選抜試験を念頭に大学進学後も必要とされる多様な能力を育成・測定・評価するプロジェクトのために設定したもので，受講者が2050年に40代後半となり，中学生の保護者になっているという想定で学校カリキュラムを構想するプロジェクトである（中切ほか，2019，2020）。

この「未来のカリキュラム」プロジェクトを参照しながら，看護学士課程志願者対象の新たな高大連携探究プロジェクトを構想し始めたところ，日本看護連盟や多くの看護関係サイトに取り上げられた「医療の2040年問題：人口減少と高齢者人口がピークを迎えて現在の医療体制の維持が困難となる問題（武藤正樹，2019）」に注目した。この未来の看護のエポックメイキングとなるテーマをパフォーマンス課題に取り上げれば，これまで実践してきた「未来のカリキュラム」プロジェクトの成果が活用出来る。こうして，新しい看護のパフォーマンス課題を設定した。

2.2 「2040年の未来の看護」の事前課題と評価

2.2.1 事前課題の開発

「2050年の未来の中学校のカリキュラムの作成」プロジェクトでは，受講者全員が福井県内の中学校の卒業生であったため，ある程度の共通基盤を土台にしてプロジェクトを実施することが出来た。しかし，今回の看護師分野は，福井県内在住の高校生といえども，受講者の生育歴・家庭環境や医療関係とのかかわりの相違，地域の特殊性や多様性等が予想された。

そこで，まず，プロジェクト前に受講者の間に何らかの共通基盤を養成しておく必要があると考えた。ここで注目されたのが，近代看護の原点として避けては通れないナイチンゲールの事績である。さらに，2040年の未来の看護の現場は病院ではなく，ナイチ

ンゲールの業績とされる在宅看護（在宅医療や訪問看護）が主流になると予想されている³⁾。

こうして，受講者にナイチンゲールの事績に対する共通理解を形成することを目的とする事前課題を決定した。そして，事前課題の説明書にはナイチンゲールを課題に設定した理由について，「プロジェクト当日は受講者に共有されたナイチンゲール像を前提とし，常にナイチンゲールの功績を振り返りながら，2040年の未来の看護について考えていく」旨を記した。この共通理解の形成がプロジェクト当日のグループワーク時に機能することを期待したのである。

以上より，日本看護協会と日本赤十字社の協力の元に編集されたポプラ社の『ナイチンゲール』を準備して受講者全員に配布した。この本の対象年齢は小学校高学年とされているが，その内容はナイチンゲールの生涯の紹介にとどまらず，彼女の生きた時代背景や彼女を支えた人々，彼女の功績と現代への影響など，豊富なボリュームである。こうして，以下の2つの事前課題（A4版の裏表に記入）を示した。

- (1) ナイチンゲールの活動成果を3点に整理してまとめ，3点に整理した理由を合わせて記すこと。
- (2) ナイチンゲールの生涯と(1)で整理した3点との間にはどのような関係（包含，対立等）があるのか示して，その理由を説明すること。

なお，提出用紙にはそれぞれの「理由」が『ナイチンゲール』の何頁からの引用か記すことを求めた。

2.2.2 パフォーマンス評価の概要

事前課題の解説プリントには，このプロジェクト全体を通して以下の能力が育成され，同時に評価者によって測定・評価されることを記した。すなわち，事前課題を元に「理解力，適用力（資料を引用する力），分析力」が育成・強化され，測定・評価される。そして，グループワークでは「相互理解力，伝達工夫力，共同創作力」，プレゼンテーションでは「表現力（言語的，非言語的）」が育成・強化され，測定・評価される。最後に，最終課題を元に「評価力，創造力」が育成・強化され，測定・評価される旨を記した。

2.2.3 プロジェクトの受講者

以上の準備段階を経て，福井県内の各高等学校に未来の看護プロジェクトの案内書と募集要項を送信した（図1）。案内文では，まず，日常生活に欠かせない医療と看護の課題として「医療の2040年問題」について紹介し，このプロジェクトは未来の看護師として何を準備すればよいのか考える機会であることを紹介した。そして，プロジェクトの概要とそこで育成・強化してほしい能力として「思考力とコミュニケーション

ンカ」の概要を紹介し、それらの能力が後日測定・評価されて修了証として還元されることを紹介した。

2.3 「2040年の未来の看護」プロジェクトの当日

2.3.1 プロジェクトの受講者と評価者

令和3（2021）年3月14日の第1回プロジェクトは受講対象者を高校2年生とし、令和3（2021）年7月18日の第2回プロジェクトは高校3年生を対象として、第1回に受講できなかった希望者を優先する案内書を福井県内の各高校に送信した。

その結果、コロナ禍にもかかわらず、どの回もたくさんの方から多くの受講希望があった。そこで、事前に連絡しておいた抽選を実施した結果、3月の第1回の受講者は12校に在籍する20名（男子3名、女子17名）に絞られ、第2回の受講者は9校に在籍する19名（女子19名）に絞られた。そして、受講決定者には、それぞれプロジェクトのおよそ1か月前に事前課題とポプラ社の書籍を送付した。

3月14日の第1回プロジェクトには、ファシリテーターとして受講者のグループワークを支援し、かつグループワークとプレゼンテーション時の評価を担当するスチューデント・アシスタント（以降SAと表記）の学生4名が参加した。7月18日の第2回には第1回の中の2名が参加した。SAは事前に今回のプロジェクトの運営と評価にかかわる研修を受けたが、彼女たちはこれまで「2050年の未来の中学校のカリ

キュラム」プロジェクトのファシリテーターや評価を担当してきた学生である。

2.3.2 プロジェクト当日の概要

表1に第2回プロジェクトの日程と評価場面を示す。2つの講義とグループワーク・プレゼンテーション、そして最終課題提出という時間割は第1回プロジェクトと同じである。以下、表1に示した日程に沿って7月18日の第2回プロジェクトの活動内容を概観する。

最初に、受付では事前課題を回収し、これを元に後日「理解力、適用力、分析力」が評価された。

午前中の講義では、3月14日の第1回プロジェクトから7月18日の第2回プロジェクトへの変更があった。第1回プロジェクトの講義Ⅰ（50分）と講義Ⅱ（50分）は、第2回プロジェクトでは講義Ⅰに短縮整理された。そして、新たに講義Ⅱでは看護学の模擬講義と模擬実習が、福井大学看護学科の教員2名と大学院生3名により実施された。

この改良は、本プロジェクトのテーマが「未来」と「看護」をセットにした「未来の看護」であるところに由来する。第1回の2つの講義では「未来」社会の方に比重を置かれすぎたという反省に基づき、第2回では「看護」にかかわる情報を豊かにして「未来の看護」の考察が地に足をつけたものとなるように修正された。こうして、講義Ⅰでは「未来」社会と「未来」に想定される医療現場を視野に講義を展開し、講義Ⅱでは「看護」の現場と「看護」の現実が講義・実習された。講義ⅠとⅡは「2040年の未来の看護」プ

表1 パフォーマンス当日の日程と評価場面

開始時刻	内 容	ファシリテーターとその活動場面	SAの評価する能力と場面
9:00	【受付】「事前課題」提出、「事前アンケート」		
9:20	【開講式】日程と評価者紹介		
9:30	【講義Ⅰ】2040年問題、未来社会、専門看護師		
10:30	休憩		
10:40	【グループワークⅠ】自己紹介、事前課題紹介		
11:10	【講義Ⅱと実習】エコー画像を用いて、ヒトの身体の中を見てみよう！～血管編～	看護学科の教員と院生	
12:10	昼食		
13:10	【グループワークⅡ】 「現在と2040年の病院と自宅」のマトリクス図を囲んで、未来の看護の話し合い	SAと看護学科の院生	相互理解力 伝達工夫力 共同創出力
14:30	休憩		
14:40	【グループワークⅢ】 プレゼンテーションの準備とリハーサル	SAと看護学科の院生	
15:20	【プレゼンテーション】1人1分半を担当		表現力① 表現力②
16:00	休憩		
16:10	【最終提出課題】作成、「事後アンケート」		
16:50	【閉講式】		

高大連携探究プロジェクト
「2040年の未来の看護」
看護師を目指す皆さん、未来の看護について一緒に考えてみませんか？
日時：2021年7月18日(日) 9:00～17:00
会場：福井大学文京キャンパス

スケジュール

9:00	受付
9:30	講義① 医療の2040年問題
10:30	グループワーク① 2040年の未来の看護について
11:20	講義② エコー画像を用いて身体の中を見てみよう！
12:20	昼食
13:20	グループワーク② 「2040年の未来の看護」に向けて何を準備すればよいか
15:20	グループ毎の プレゼンテーション
16:20	最終課題
17:00	

講師（榎本 有、榎本 聡）
福井大学医学部看護学科 四谷 淳子
福井大学アドミッションセンター 中切 正人

日常生活に欠かせない医療と看護。事前課題や講義を通して、「医療の2040年問題：人口減少と高齢者人口がピークを迎えて現在の医療体制の維持が困難となる問題」について、未来の看護師として何を準備すればよいか考えてみましょう。

当日はグループワークやプレゼンテーションの他、医学部看護学科の先生によるエコー画像に関する講義を実施する予定です。また、講座終了後には修了証明書を授与します。

■申込方法
参加を希望されている方は、6月16日(水)までに福井大学に連絡が届くように、各高校の

新型コロナウイルス予防対策
○当日はマスクまたはフェイスシールド

図1 「2040年の未来の看護」プロジェクト募集ポスター

プロジェクトに不可欠の両輪である。

具体的にみると、講義 I では、医療の 2040 年問題と 2040 年の未来社会の概要という「未来」を取り上げ、そこに NHK プロフェッショナルの 2 人の専門看護師の事例が加わる形とした。最初に、2040 年にはわが国を筆頭にアジア諸国で 65 歳以上人口が急増し、わが国では 100 歳以上が 30 万人を超えて、働く世代の 1 人が高齢者 1 人を養う予想とされ、その変化を先取りしているイギリスのホスピスが福井大学看護学科の研修先である事例を紹介した。次に、Society 5.0 や AI の活躍する未来世界と医療の世界を示し(川口, 2020; 成毛, 2021; ほか), グループワークの核となる「未来の看護のマトリクス図」を提示した。そして、未来の看護師として第 I 象限の「2040 年の未来の在宅看護」のあり方を明らかにする課題を提示した(図 2)。そして『NHK プロフェッショナル仕事の流儀: がん専門看護師田村恵子』(NHK, 2009) と『専門看護師北村愛子』(NHK, 2007) を短縮編集した映像を流し、細分化に向かう医学と対照的な、全体的・包括的な看護学の姿を示した。

講義 I の終了後受講者は一旦グループワークの部屋に移動し、SA も加わってグループ別にアイスブレイクを実施した。そして事前課題の内容を報告し合った。

次の講義 II では看護学の模擬講義として、本学看護学科の教員と大学院生により「上肢の皮下静脈走行のパターン」と静脈穿刺(せんし)技術が紹介され、エコー画像で血管を観察する模擬実習が展開された。ここでは、ポータブル超音波画像診断装置を用いて、受講者それぞれが看護実習を体験することが出来た。そこには、第 1 回プロジェクトでは見られなかった歓声と感動の姿があった。

昼食を挟んで、午後のグループワーク II は、以下の作業手順を示すところから始まった。(1)マトリクスの 4 象限にそれぞれ当てはまる事例をメモして各象限に張り付ける。それは、現在と未来の看護に関する事項を 20 字以内に付箋に記し、ボードに添付する作

業である。たとえば、付箋に「交通事故で足を複雑骨折」と記入すれば、現在は病院に入院する第 III 象限に添付されるが、未来は「歩行スーツを着用して自宅で看護」されることが予想されることが付箋に記入されて第 I 象限に添付となる。(2)付箋の記入と添付が一段落すれば、各象限の事例をまとめてその特色を象限毎に 3 点に整理する。(3)プレゼンテーション用に、第 I 象限について 3 点に整理した理由を観点毎にまとめて、それぞれの観点の特色をまとめる。

作業手順の提示後、各グループではファシリテーターとして新たに看護学科の大学院生が加わり、作業手順(1)の各象限に張り付ける付箋の作成に入った。30 分経過後、受講者達には他のグループの様子や付箋の内容を参照する時間が設けられた。その後 13 時 40 分頃、SA により 10 分間「相互理解力」と「伝達工夫力」が測定・評価された。SA は評価後、再びグループワークの助言・支援を再開した。その間もグループワークは続き、作業手順(2)の各象限を 3 点に整理する作業に入った。そして、14 時頃に、全体に向かってマトリクス図の第 I 象限を重点的に埋めることが指示された。こうして、各グループではファシリテーターによって第 I 象限の整理がリードされ、14 時 20 分になると、残り 10 分で SA により「共同創出力」が測定・評価された。

休憩を挟んでグループワーク III では、グループ毎にプレゼンテーションのリハーサルを 40 分程度実施した。ここでは、各自が発表内容とその手順を確認し、1 人 1 分半程度の持ち時間で練習を繰り返した。ファシリテーターは、プレゼンテーションで評価される言語的観点と非言語的観点を意識しながら、指導を行った。そして、プレゼンテーションでは、全員を対象に「表現力①と②」が測定・評価された。

プレゼン終了後、ここまでの一連の活動を元にして、最終的に受講者各自が考える第 I 象限の 2040 年の未来の看護について、3 点以内で論じてその理由を説明する課題を示した。後日この最終課題レポートを対象に「評価力、創造力」が測定・評価された。

3 測定・評価された能力とその構成要素

今回のプロジェクトで測定・評価された能力は、これまでのプロジェクト「2050 年の未来のカリキュラム」で測定・評価されてきた「思考力」と「コミュニケーション力」を踏襲するものである。

ただし「思考力」の評価規準と評価基準については、評価対象が「2040 年の未来の看護」に変更されているため、その記述は大幅に異なるものとなった。これ

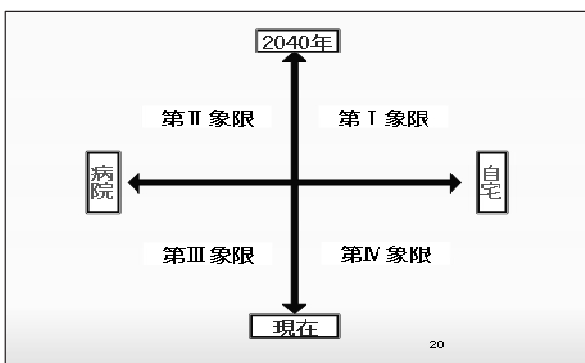


図2 未来の看護のマトリクス図

に対し、「コミュニケーション力」はグループワークとプレゼンテーションが測定・評価される対象であることから大幅な変更ではなく、その評価規準と評価基準の文言の一部に若干の修正が施された。

3.1 「思考力」の評価規準と評価基準

「思考力」の構造と構成要素の設定には、アンダーソンらの改訂版タキソノミーを参照し(Anderson, 2001)、「理解力」から「創造力」に向かって高次となる構造をとる 5 個の構成要素を設定した。以下、各構成要素と評価規準(何を学習するか)を記す。表 2 はその評価基準で、「3」を標準とする。

理解力：ポプラ社『ナイチンゲール』を解釈し、活動成果を 3 点に例示、分類、説明出来る能力。

適用力：『ナイチンゲール』の記述を活用、適用することが出来る能力

分析力：ナイチンゲールの生涯と「3 点の活動成果」との関係(強弱, +, -, 包含, 対立, 等)を識別、構造化することが出来る能力。

評価力：未来の看護と自宅の比率や、死に向かう最良の状態や方向性を判断することが出来る能力。

創造力：既成の看護観念を超えた看護のあり方や、病院と自宅の斬新な看護プラン等を発想出来る能力。

以上の 5 つの構成要素は学校教育法第 30 条に示された学力の三要素の「思考力・判断力」に対応する。

3.2 「コミュニケーション力」の評価規準と評価基準

「コミュニケーション力」の構造と構成要素の設定には、中切ほか(2019)に記された 5 つの構成要素を参照した。以下、その評価規準を記す。表 3 はその評価基準で「3」を基準とする。

相互理解力：他者の話す内容や意見に合理的な理解・判断を下したり、共感したりすることによって議論しやすい場を作り出すことが出来る能力。

伝達工夫力：他者に分かりやすいように自分の考えや意見を伝達する工夫をしたり、グループで協働して行動する雰囲気を作り上げたりする能力。

共同創作力：他者と共同して一つの研究成果をまとめ、完成させることが出来る能力。議論を深める質間で、自己の見解との整合性を図る提案や見解を提示する。

表現力①：プレゼンテーション時の非言語的表現にかかわる能力。聞き取りやすい発声で、しっかりとアイコンタクトし、ジェスチャー豊かに表現する。

表現力②：プレゼンテーション時の言語的表現にかかわる能力。キーワードを適切に使用したり、根拠を示したりして論理的に伝えることが出来る能力。

4 まとめと今後の課題

4.1 受講者の感想

第 1 回と同様に第 2 回プロジェクトでも受講者の事後アンケートには多くの記述が見られた。

それらの記述を見ると、午前中は未来社会を想像しながら現実的な「エコー画像で血管を観察する模擬実習」を体験することによって AI の看護について想像したり、患者さんの立場に立って考えたりする体験が出来たこと、さらに、午後からはグループワークを通してコミュニケーション力を身に付けたり、在宅看護に関心を抱いたり、治療の原点として人間力を再確

表2 思考力の評価基準

思考力	1	2	3(標準)	4
理解力	・事前配布資料を解釈できないため、提出課題(1)の回答欄にナイチンゲールの活動成果の3点を記すことが出来ない。	・事前配布資料を解釈した上で、提出課題(1)の回答欄にナイチンゲールの活動成果の3点のうち、1点についてはその特徴を分類したり、推測したり、比較したり、説明したりする記述が出来る。	・事前配布資料を解釈した上で、提出課題(1)の回答欄にナイチンゲールの活動成果の3点のうち、2点についてはその特徴を分類したり、推測したり、比較したり、説明したりする記述が出来る。	・事前配布資料を解釈した上で、提出課題(1)の回答欄にナイチンゲールの活動成果の3点のうち、3点全てについて、それぞれ十分にその特徴を分類したり、推測したり、比較したり、説明したりする記述が出来る。
適用力	・提出課題(1)(2)の回答欄において、ナイチンゲールの活動成果について、事前配布資料の記述や内容を活用したり、適用したり、応用したりする記述が見られない。	・提出課題(1)(2)の回答欄において、ナイチンゲールの活動成果の1点については、事前配布資料の記述や内容を活用したり、適用したり、応用したりする記述が見られる。	・提出課題(1)(2)の回答欄において、ナイチンゲールの活動成果の2点については、事前配布資料の記述や内容を活用したり、適用したり、応用したりする記述が見られる。	・提出課題(1)(2)の回答欄において、ナイチンゲールの活動成果の3点の全てについて、事前配布資料の記述や内容を活用したり、適用したり、応用したりする記述が見られる。
分析力	・提出課題(2)の回答欄で、ナイチンゲールの生涯と活動成果の関係性(強弱, +, -, 包含, 対立, 等)のどの観点についても、その関係性(強弱, +, -, 包含, 対立, 等)が識別されたり、構造化されたり、組織化されたりして記述されていない。	・提出課題(2)の回答欄で、ナイチンゲールの生涯と活動成果の関係性(強弱, +, -, 包含, 対立, 等)の1点については、その関係性(強弱, +, -, 包含, 対立, 等)が識別されたり、構造化されたり、組織化されたりして記述されている。	・提出課題(2)の回答欄で、ナイチンゲールの生涯と活動成果の関係性(強弱, +, -, 包含, 対立, 等)の2点については、その関係性(強弱, +, -, 包含, 対立, 等)が識別されたり、構造化されたり、組織化されたりして記述されている。	・提出課題(2)の回答欄で、ナイチンゲールの生涯と活動成果の関係性(強弱, +, -, 包含, 対立, 等)の3点共に、その関係性(強弱, +, -, 包含, 対立, 等)が識別されたり、構造化されたり、組織化されたりして記述されている。
評価力	・最終提出課題に記されたどの事項においても、患者の自宅での生活とそれに対する看護の理想的なバランスを判断したり批判したり、あるいは、患者の死に向かう最良の状態やその方向性を判断したり批判したりすることが出来ない。	・最終提出課題に記された1つの事項において、患者の自宅での生活とそれに対する看護の理想的なバランスを判断したり批判したり、あるいは、患者の死に向かう最良の状態やその方向性を判断したり批判したりすることが出来る。	・最終提出課題に記された2つの事項において、患者の自宅での生活とそれに対する看護の理想的なバランスを判断したり批判したり、あるいは、患者の死に向かう最良の状態やその方向性を判断したり批判したりすることが出来る。	・最終提出課題に記された3つの事項において、患者の自宅での生活とそれに対する看護の理想的なバランスを十分に判断したり批判したり、あるいは、患者の死に向かう最良の状態やその方向性を十分に判断したり批判したりすることが出来る。
創造力	・最終提出課題に記されたどの事項においても、これまでの看護概念を超える新たな看護のあり方を発案したり、病院と自宅の看護プランを斬新な視点で描いたり出来ない。	・最終提出課題に記された1つの事項において、これまでの看護概念を超える新たな看護のあり方を発案したり、病院と自宅の看護プランを斬新な視点で描いたりすることが出来る。	・最終提出課題に記された2つの事項において、これまでの看護概念を超える新たな看護のあり方を発案したり、病院と自宅の看護プランを斬新な視点で描いたりすることが出来る。	・最終提出課題に記された3つの事項において、これまでの看護概念を超える新たな看護のあり方を発案したり、病院と自宅の看護プランを斬新な視点で描いたりすることが出来るだけでなく、全く新しい発想で看護のあり方や看護医療体制を考案したり、新しい可能性を生み出すことが出来る。

認したりすることが出来た、という感想が記されている。

このように、受講者は出身校も出身地もばらばらで、ほとんど顔見知りのいない集団の中で、看護という明確な 1 点で共通性の高い仲間と一緒に学び、体験し、そして多くを収穫した様子が確認することが出来たと考える。

さらに、最終課題終了後に 20 分程度の時間を確保して 2 回目のグループワークを立ち上げ、最終課題で書いた内容を紹介し合う改善案も出された。これにより受講者の学習がさらに深まることが期待される。

4.3 まとめと今後の課題

以上、本研究では看護学士課程志願者の選抜試験での活用を前提に、看護の 2040 年問題に題材を得た

「未来の看護」のあり方をパフォーマンス課題として設定した 2 回のプロジェクトを総括した。

受講者からは高い評価を得ることが出来たが、観察者とファシリテーターからはいくつかの改善策が提案された。これらを参考に、次の第 3 回プロジェクトを福井大学医学部の松岡キャンパスで実施し、さらなる改革案を提示したい。

また、パフォーマンス評価については大幅な改革は指摘されなかった。今後は、これまで実践してき

た「2050 年の未来のカリキュラム」のパフォーマンス評価の課題と反省を参照しながら、妥当性と信頼性を検証していきたい。

注

1) 看護学士課程の卒業生に求められる看護実践能力を分析した論考(松谷ほか, 2010)を見ると、その構成要素は 7 つに分類され、それらは①「人々・状況を理解する力」と②「人々中心の看護ケアを実践する力」と③「看護の質を改善する力」に整理されている。本研究は、その中で看護教育の初期段階に位置づけられ、選抜試験に最も関連すると考えられる構成要素①、すなわち「知識の適用(アセスメント)力」と「人間関係をつくる(コミュニケーション)力」を取り上げる。さらに、前者は学習指導要領の「思考力・判断力」にかかわる能力であると考えられる。

表3 コミュニケーション力の評価基準

コミカ	1	2	3(標準)	4
相互理解力	・他者の話す内容を最後まで集中して聞くことが出来ない、あるいは、他者の話の内容に対して合理的な理解・判断を下したり、共感したりすることが出来ない(同意する発言や、何らかの質問をするような反応が見られない)。	・他者の話す内容を最後まで集中して聞くことが出来、それに対して合理的な理解・判断を下したり、共感したりすることが出来る(他者の話の内容に同意する発言が見られたり、もしくは内容に対する何らかの質問が見られたりする)。	・他者の話す内容を最後まで集中して聞くことが出来、それに対して合理的な理解・判断を下したり、共感したりすることが出来る(他者の話の内容のポイントを示すなどして他者の考えに的確に同意する発言が見られたり、話の内容に沿った的確な質問が見られたりする)。	・他者の話す内容を最後まで集中して聞くことが出来、それに対して合理的な理解・判断を下したり、共感したりすることが出来る(他者の話の内容のポイントを示すなどして他者の考えに的確に同意する発言が見られたり、話の内容に沿った的確な質問が見られたりする)。さらに、同意や質問を通して、相手の話しやすい状況を作り出し、グループで議論する土台を形成することが出来る。
伝達工夫力	・自分の考えや質問事項を、分かりやすく整理することが出来ないため、あいまいな口調になりがちで、聞き手に分かりやすく伝えることが出来ない。	・自分の考えや質問事項を、分かりやすく整理しているため、あいまいな口調ながらも、聞き手に分かりやすく伝えることが出来る。	・自分の考えや質問事項を、筋道立てて分かりやすく整理して、はっきりとした口調で、聞き手に伝えることが出来る。	・自分の考えや質問事項を、筋道立てて分かりやすく整理して、はっきりとした口調で、聞き手に分かりやすく伝えることが出来る。さらに、相手から質問を受けやすい雰囲気や状況を作り出して、グループで議論する土台を形成することが出来る。
共同創作力	・自分の意見やアイデアを一方的に主張し、グループのメンバーを説得して、自分の意見やアイデアに従わせようとする。	・自分の意見やアイデアとグループのメンバーの意見やアイデアを表面的にすり合わせるレベルにとどまる。そのため、相手の理解を十分得られることなく、自己の見解をグループの意見やアイデアとしてまとめようとする。	・自分の意見やアイデアとグループのメンバーの意見やアイデアを互いにすり合わせることで、グループとして一つの意見やアイデアにまとめることが出来る。	・自分の意見やアイデアとグループの意見やアイデアを、深く分析したり比較したりすることによって互いの長所を生かすことに成功し、ワランクレベルが上の意見やアイデアとしてまとめることが出来る。たとえば、グループワーク時に議論を深める質問をしたり、相手の見解を正確に理解した上で自己の見解との整合性を図ったり、あるいは修正案を提示したりすることによって、自己と相手の見解を高次元で融合させることが出来る。
表現力①	・プレゼンテーション時において、聞き取りにくい発声で、アイコンタクトも不十分で、ジェスチャーも少なく表現している。	・プレゼンテーション時において、ある程度聞き取りやすい発声で、アイコンタクトを試みながら、ジェスチャーを加えて表現することが出来る。	・プレゼンテーション時において、聞き取りやすい発声で、しっかりとアイコンタクトをしながら、ジェスチャー豊かに表現することが出来る。	・プレゼンテーション時において、非常に聞き取りやすい発声で、しっかりと十分にアイコンタクトが出来ながら、大変ジェスチャー豊かに表現することが出来る。
表現力②	・プレゼンテーション時において、キーワードを適切に使用したり、根拠を明確に示したりすることが出来ないため、発表内容を論理的に伝えることが出来ない。	・プレゼンテーション時において、キーワードを適切に使用することは出来るが、根拠を示した上で論理的に発表内容を伝えることが出来ないため、視聴者の理解を十分得ることが出来ない。	・プレゼンテーション時において、キーワードを適切に使用し、根拠を示したうえで論理的に発表内容をつたえることが出来るため、視聴者は発言内容を理解することが出来る。	・プレゼンテーション時において、キーワードを正確かつ適切に使用するばかりでなく、発表内容の根拠的かつ明確に示したうえで、理路整然と論理的に説明することが出来る。そのため、視聴者は発表内容を十分理解し、納得することが出来る。

4.2 プロジェクトの観察者とファシリテーター(評価者の SA を含む)によるプロジェクトの評価

ここでは 7 月 18 日の第 2 回プロジェクト後に、観察者とファシリテーター(評価者の SA を含む)によって指摘された事項を記す。

まず、今回は、NHK プロフェッショナルの映像部分については、よりリアリティを持たせるために、福井大学看護学科出身の専門看護師として地元で活躍している人を講師に招いて担当してもらう。

次に、午後のグループワーク II ではいきなりマトリクス図の 4 つの象限を分析するのではなく、まず、現在の第 III・第 IV 象限の事例を挙げる。その上で、各事例がそのまま未来の第 I・第 II 象限に対応してくるのかどうか検討するところから始める。それにより、パフォーマンス課題の主旨である「第 III 象限から第 I 象限への移動」の視点が養われると考えられる。

- 2) 経済産業省 (2019年3月5日) の「資料4」の17, 18枚目に、18歳～64歳で65歳以上を支える場合2017年は2.1人で1人、2040年は1.5人で1人、2065年は1.3人で1人になると予想されている。
- 3) 小川 (2016) では、ナイチンゲールには「病院は文明の中間段階にすぎない」という認識があり、在宅看護の概念を作った元祖であると記されている。

謝辞

なお、プロジェクト受講者による研究協力への同意を事後に得た。ここに謝意を表す。

参考文献

- Anderson, L. W., et al (Eds.) (2001). *A Taxonomy for Learning, Teaching, and Assessing*, Longman.
- 川口伸明 (2020). 『2060 未来創造の白地図——人類史上最高にエキサイティングな冒険が始まる』技術評論社
- 経済産業省 (2019年3月5日). 「第1回産業構造審議会2050経済社会構造部会」資料4.
https://www.meti.go.jp/shingikai/sankoshin/2050_keizai/001.html (2021年3月18日).
- 松谷美和子・三浦友理子・ほか12名 (2010). 「看護基礎教育修了時における看護実践能力の尺度開発」『聖路加看護学会誌』14(2), 18–28.
- 中切正人・橋本康弘・宮下伊吉・大久保貢 (2019). 「AO・推薦入試を見据えた文系パフォーマンス評価——パフォーマンス課題「未来の時間割」の実践とコミュニケーション力の評価の分析——」『大学入試研究ジャーナル』29, 85–90.
- 中切正人・橋本康弘・宮下伊吉・大久保貢 (2020). 「総合型選抜・学校推薦型選抜を見据えた文系パフォーマンス評価の研究——パフォーマンス課題の実践とルーブリックの分析——」『大学入試研究ジャーナル』30, 234–241.
- 成毛眞 (2021). 『2040年の未来予測』日経BP.
- NHK (2009). 『プロフェッショナル仕事の流儀：がん専門看護師 田村恵子の仕事』NHKエンタープライズ (DVDビデオ).
- NHK (2007). 『プロフェッショナル仕事の流儀：専門看護師北村愛子の仕事』NHKエンタープライズ (DVDビデオ).
- 武藤正樹 (2019). 「2040年問題とICT」
<http://masaki.muto.net/lecture/201904271.pdf> (2021年2月24日).
- 小川典子 (2016). 「フロレンス・ナイチンゲールが描いた21世紀における在宅看護」『順天堂保健看護研究』4, 1–12.
- プロジェクト新・偉人伝 (2009). 『この人を見よ！歴史をつくった人びと伝 (18) ナイチンゲール』ポプラ社.
- 潮木守一 (2004). 『世界の大学危機』中央公論社.